

科目名	ジェンダー論(総合講座)A				
担当教員	岡島 克樹				
配当	文 3・教育3・人間3		コード	54550	
開期	前期	講時	金曜日4限	単位数	2
授業テーマ	「性」に関する「常識」や「思い込み」を再検討する。				
目的と概要	「性」は、語りの寡少と過剰の中で、「常識」や「思い込み」というものが充満している。例えば、「性別」には「男性」と「女性」の二つしかない、「セクシュアリティ」には「異性愛」しかないと思っ込んでいる人がほとんどではないだろうか。本講は、こうした性に関する思い込みや常識を問うてきたジェンダー論の歴史的発展・関心の変遷、ジェンダー論で頻繁に用いられる基本的な用語について解説する。また、受講者とともに、この思い込みが自分自身や他者、あるいは社会全体に与えるインパクトについて検討し、そのような思い込みが生まれる背景・構造を見つめ、これを転換するための方途について考えていく。				
成績評価法	前期末レポート80%、授業への貢献(外部講師によるレクチャーへの参加、発言等)20%				
テキスト	適宜、コピーを配布する。				
参考書	適宜、紹介する。				
履修に当たっての注意・助言					
講義計画					
<p>「性」をめぐる「常識」は時代とともに変化してきている。世界の多くの場所ではかつて存在していた政治的権利に関するあからさまな男女間格差は少なくとも制度上存在しなくなってきた(もちろん、まだ女性が選挙権を持たない地域は存在するが)。従業員1000名以上を雇用する大企業における男女間の給与格差が億単位で存在する日本を含めて、男女間に著しい経済格差があっても仕方がないという「常識」が存続しているところもあるが、それでも女性の経済分野での進出にはめざましいものがある。また、このような政治や職場といった公的領域以外、すなわち、家庭や恋人・婚姻関係といった私的領域では、既に家事・育児に関する負担についての男女間格差の解消に一定成功した国もある。さらに、90年代初頭以降のゲイブームや2000年代以降の性同一性障がい者による運動の進展に見られるように性的マイノリティに対する理解も一定進んできている。</p> <p>このような流れの中で、ジェンダー論はどのような貢献をしてきたのであろうか。本講では、ジェンダー論の変遷を解説する中で、ジェンダー論の社会への貢献を考える。</p> <p>現在、一つの英単語に込められた深く豊かな意味を一語で表す日本語がないため、カタカナ表記して使うことが増えてきている。ジェンダー論も例外ではなく、そこで用いられる用語にはカタカナのものが少なくない。そこで、本講では、性自認、性別、性役割、性差、本質主義・構築主義、脱構築、商品化といった漢字熟語の他、ジェンダー・フリー、セックスワーク、ホモフォビア、ホモソーシャルリティ、クイア理論、フェミニズムとポストフェミニズム、バックラッシュ、GEM、FGM(性器切除)といったジェンダー論で頻繁に用いられるカタカナ専門用語もあわせて紹介する。本講を通じてジェンダーに関する興味・関心を持ってくれた受講生諸君には、本講で身につける「ジェンダー語の基礎文法」についての知識を駆使して、本講終了後もジェンダーに関する書籍を自力で読み、さらに問題意識を深め、行動していただいたい。</p>					
<p>1回目：自己紹介・本講の目的解説・「性」の定義 2回目：「第2波フェミニズム」・・・婦人論の時代から女性学の時代へ(その1) 3回目：「第2派フェミニズム」・・・婦人論の時代から女性学の時代へ(その2) 4回目：女性学からジェンダー研究へ(その1) 5回目：女性学からジェンダー研究へ(その2) 6回目：外部講師(その1) 7回目：外部講師(その2) 8回目：ジェンダー研究の諸特徴のまとめ 9回目：男女共同参画社会とはなにか 10回目：学生の関心に従ってジェンダー研究の諸分野を紹介(その1) 11回目：学生の関心に従ってジェンダー研究の諸分野を紹介(その2) 12回目：学生の関心に従ってジェンダー研究の諸分野を紹介(その3) 13回目：学生の関心に従ってジェンダー研究の諸分野を紹介(その4) 14回目：学生の関心に従ってジェンダー研究の諸分野を紹介(その5) 15回目：まとめ</p>					
<p>受講生は、卒業後、結婚し家庭の主婦・母親になる、あるいは教育や福祉の現場や企業という職場で働く者も少なくない。そして、その中で、子どもたちや職場の同僚・後輩などに影響を与える立場に立ち、本シラバスの最初で記したような「思い込み」の強化・拡大に貢献してしまうこともある。本講では、なるだけ受講者の興味・関心に沿って、家庭における教育、学校教育、福祉、テレビドラマなど、受講生の関心によって講義を展開していく。</p>					
<p>また、担当教員のネットワークを利用して、ある特定分野に精通した外部講師(外部のゲストスピーカー)を招くことがある。受講生は必ず参加するようにしてください。</p>					